

国宝 源氏物語絵巻

五島美術館（世田谷区上野毛3） 24.04.27～05.06

《源氏物語絵巻》は、漢学者・詩人の「藤原為時」の娘である「紫式部」（生没年未詳で973～1031年頃）が、主人公「光源氏」の生涯を軸にして平安時代の貴族の世界を描いた『源氏物語』を絵画化した「絵巻」で、物語が成立約150年後の12世紀に誕生した日本の絵巻の中で最も古い作品である。

毎年春のゴールデンウィークに1週間に限って展示されている絵巻の内容は、『源氏物語』54帖の各帖より1～3場面を選び絵画化し、その絵に対応する物語本文を書写した「詞書（ことばがき）」を各図の前に添えて「詞書」と「絵」を交互に繰り返す形式で、現在は「54帖全体の約4分の1、巻数にすると4巻分」が現存している。この流れるように美しく書かれている文面は、よく見ると一様ではないようで、優美繊細な書、張りのある力強い書、新旧の書風が混ざり和様の書が大きく転換する時代の特徴が表れている。



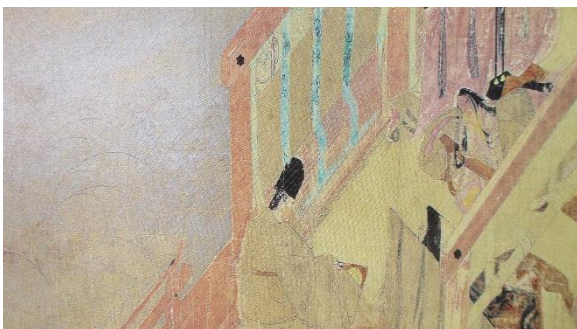
《東屋一》第50帖

浮舟の婚約破断を不憫に思った浮舟の母は浮舟を中君に預ける。御所から戻った尼宮は浮舟を見つけ、中君の異母妹だとは知らず言い寄るが浮舟は危うく逃れる。中君は異母妹の心を慰めようと「絵物語」を見せる。



国宝 《鈴虫一》第38帖

光源氏は出家した女三の住まいの前庭を秋の野原の風情に造り変え「鈴虫」を放ち、捨てがたい女三の宮への未練を和歌で詠んでいる。



《御法（みのり）》第40帖

紫の上の病気は次第に弱っていった。彼女は出家を望むが、「光源氏」はこれを許さない。秋に光源氏が証の中宮と紫の上を見舞うと、風にたわむ秋の花を見ながら紫の上が別れの和歌を詠み返歌があった。